

## 植物たちのワイズユース

～植物をもっと活かすための知恵と技術～

# 新しい産業への可能性を探る



辻井 達一 (つじい たついち)

財北海道環境財団理事長

1931年東京都生まれ。59年北海道大学大学院農学研究科博士課程修了・農学博士。60年北海道大学農学部講師、62年北海道大学教授、85～89年北海道大学農学部附属植物園長（併任）、88年北海道大学農学部教授（農林生態学研究室）、95年北星学園大学教授、97年財北海道環境財団理事長。国際湿地保全連合理事、日本委員会会長、釧路国際ウェットランドセンター理事等公職多数。

### 1 女王陛下のワラビ、日本が一番、山菜を食べる？

英国ロンドンの真ん中、ハイドパークでワラビを採ったという廉で捕まった日本人がいるそうだ。いくらハイドパークと言ってもワラビが生えているのは片隅だろうし、花壇の花を折ったわけではなし、たかがワラビ、と思えるのだが、一つにはワラビ一本だろうと公共の場のもの、しかも英国（ロンドンの）公園というのは女王陛下の所有だから、つまりは「女王陛下のワラビ」を採った、という廉だ。日本だって皇居内庭で何か採れば文句を言われかねまい。

ただし、ここで面白いのは、ものがワラビだったことにある。英国人の感覚ではなぜ、ワラビを？という疑問が大きかったのだろう。彼らはワラビを食用とはしない。私の知っている限りではアラスカのローカル・クッキングブックには「クサソテツのサラダ」が載ってはいるが。

もう一つの例を挙げよう。かつてアメリカのスミソニアン博物館から民族植物学をやっている人が訪ねてきたときのことだ。彼女は野生植物がどのように食用として用いられているかを調べていて、それまで中米や南米の例を対象としてきたそうだが、日本でのそれを調べたいということだった。そういうことなら北海道よりも東北地方でしょう、と言ったら、いや、既にその東北地方は東京から北上して通ってきた、途中ではもっぱら山菜蕎麦を食べてきた、ということだった。

そこで、まず札幌の二条市場へ案内したら春の山菜が並んでいてニリンソウ、キバナノアマナ、エゾエンゴサク、ギョウジャニンニク、タランボ、セリとにぎやかである。喜んで写真を撮ったりしたが、帰りがけにデパート地下の食品売り場でネマガリタケ、フキ、ワラビなどが並んでいるのを見て、もっと驚いた。当方には当たり前の風景だが、彼女に言わせるところで



ペルーのマーケット

ある。「ローカル・マーケットの路上などでローカル・ピープルが野草などを並べているのはどこにもある風景だ。英国でも田舎へ行けばローカルな野草が並べられ、野の花が売られていて、それらが喜ばれている例はある。しかし、ロンドンなど大都会の、たとえばフォトナム・アンド・メゾンなどの食品売り場で野草の類が美しく並べられているということはない」と。そして、こうも言った「ひょっとすると先進国としては日本が一番、野草を食べる国かもしれない、多くの優れた野菜があるにもかかわらず」。

なるほど、そうかもしれない。私たちは野菜がないから、少ないから野草を食べるのではない。それは野菜とは違った食味、あるいは香味を楽しむためであり野菜の代わりではない。

彼女にはたとえば正月の七草粥などもごちそうすればよかった。そしてその材料としてきれいに小籠に盛り付けられた七草のセットが食品売り場に並べられていて人々が買い求めているのを見たら、そういう野草を楽しむ文化や伝統があることが理解できたのではないか。あるいは草餅、柏餅、桜餅などでもよかった。残念ながら、そのいずれの季節でもなかった。植物を使う、という点ではまさに日本は最も多様性が高いと思われる。

この傾向は現在でも続いていると思う。続いているというのは、伝統的に続けられているというだけでなく、新たな食材としても加えられているということだ。たとえばスーパーマーケットにはオカヒジキがれっきとした食品としてパッケージされて並んでいる。ハマボウフウはもちろん昔から食べられてはいたが、これもほとんど年中、並べられている。つまり栽

培化されているのだ。ノビル、ギョウジャニンニクまたしかりで、これも一般化した。海のものではワカメ、ヒジキはもちろん、フノリ、アオノリ、イワノリなどなど。先に中国で金針菜と呼ばれるエゾカンゾウ、エゾキスゲのことを述べたが、これも近い将来、北海道でも栽培されることになるだろう。

## 2 ササを見直そう

食用のものばかりではない。いや、もっと必要でしかも可能性が高いのは法面のりめんに使うべき材料としての種類だ。従来は、というか、ほとんど慣習的と言ったほうが当たっているほど、法面と言え牧草類が圧倒的であった。種は安いしまきやすいし、しっかり根を張るからもっともなのだが、いかんせん外来種だ。最近、外来種や移入種が目の敵扱いになってきているが、特に周辺域への侵入の心配さえなければなにもすべてを白い目で見ることはない。牧草類で警戒しなければならないのは高山帯近くなどでのシロツメクサくらいだろう。

もっとも普遍的なのはチモシー、オーチャードだが、牧草の常で数年経つと劣化する。牧草地ならまきかえせばいいが、法面ではそうもいかない。何とか考えなければならぬ。そこで一番いいのはやはりササだろうと思われるのだ。

ササはほとんど日本特有に近い植物である。種類も極めて多くてサイズもかなり背の高いチシマザサ（根曲がり竹）から、ずっと低いオカメザサまでであるが、大きいものはともかく、小さくて低いものは法面のカバーとして優れている。

北海道ではミヤコザサの仲間がいい。十勝から根室



英国のギョウジャニンニク



京都庭園のオカメザサ群落

にかけての沿岸部に分布するものはことに背が低い。別に手を掛けなくても斜面をほとんど完全に覆ってしまう。私は以前からこれらの地方を通るときには、特に背の低いものがあつたら地図にマークしている。有望なものがあつたら集めておこうと思うのだ。

京都に竹笹植物園というのがあって、ここにはいろいろなササが集められている。中ではオカメザサが法面向きだが、これは既に目を付けられていて、庭園では地被植物としてしばしば用いられているから京都のお庭で見た人も多いはずである。

ササは造林には厄介者で、北海道ではことにそうした悪役のイメージが強いが、種類によってはうまく使いこなせばいいのだ。品種として固定させれば、オカメザサのように園芸的、あるいはさらに一步を進めて建設的に使える新素材に仕立てればパテントものであろう。

低灌木<sup>かんぼく</sup>ではアカミノイヌツゲ、ハイイヌツゲ、エゾユズリハ、フッキソウ、コケモモ、ガンコウランなどがお勧めである。これらは法面向きだが、場所によってはホザキシモツケなどもいいだろう。

海岸だったらリシリビヤクシン、ハイネズなども有

望である。これらはかなり以前からアメリカで利用試験が行われた。サンショウも考えられてもいい。これはそれこそ近來、問題になっているエゾシカも食わないから、牧野向きではないか。

### 3 真っ白なキバナシャクナゲ

いつか、アメリカの植物園からキバナシャクナゲが欲しい、と言ってきたことがあつた。キバナシャクナゲは高山植物の名品の一つで、その花色は名のとおり、典雅なパール・イエロー、すなわち淡いレモン色の上品なものである。依頼してきたところの話では、これをぜひ園芸化したい、たとえばもっと鮮やかな黄色とか、白とか、などと言うので、余計な発想ではないか、日本だと、まずその自然の色を大切にするのに、と考え方の差を面白く思った。

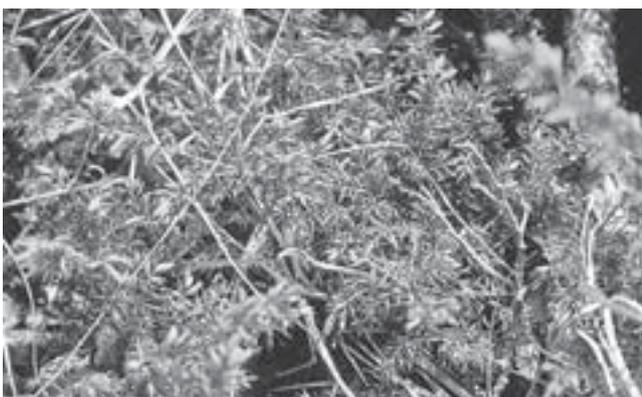
別の植物園からは、北海道の大きなフキをと頼まれたことがある。これは食用としてではなくて池の縁に植えるという。まさに観葉植物ということだろう。それなら大きい方がいいだろうとラワンブキを送った。<sup>きょうぶき</sup>京蔭ならともかく、日本で庭にアキタブキ（オオブキ）いわんやラワンブキを植えようという人はいまい。



釧路地方のミヤコザサ



キバナシャクナゲ



ハイネズ



大正時代のラワンブキ（足寄町所蔵の写真）



ツタウルシ

似たような大柄なものにはパタゴニアにグンネラ・マゲラニカ、そしてアラスカにもとげの生えた化け物のようなものがあり、これは私も北大植物園に植えた。まあ、他所の国のものは珍しがって植えるものだが、自分の国のもの、地方のものも見直してもいい。四国沿岸のクワズイモなども見事なものなのだから。

そういう見方なら、オオイタドリはどうか。これは雑草の扱いで、むしろ邪魔、海外ではジャパニーズ・ノットウィードと呼ばれて目の敵にされるが、昔は結構、食用とされていたし、今、再び豊富町で、その塩漬けが作られている。庭園用でなくて、これは食品として再登場したわけだが、その長大な茎は乾燥させたものを編んで雪除けにも使われた。景観的には板囲いだとか、波板などよりもはるかに風情があった。

蔓植物もいい。ツタウルシはどうか。秋には真紅の紅葉が美しい。ツルアジサイは園芸的には既に来たヨーロッパで使われている。

まだ、いろいろな“かつて使われていて、消え失せた”種類、そして“これから、うまく活用の可能性のある”種類がたくさんあるに違いない。再点検、再発見することが必要だろう。

#### 4 新たな産業化への道を探る

ここまで、野生植物の見直しと活用への可能性について述べてきた。それは直接的には道路などの周辺植栽種のいわゆる郷土種化ということにつながり、結局

のところ、それぞれの地域景観の特徴付けにつながるはずだ。実はそれが最終のターゲットなのだ。

偏見や既成概念をまず捨てることが大切だろう。これは植物を考えることに限らず、何でも新しいこと、再発見しようとする場合に最も肝要なことでもある。

たとえば自動車道路はいわば「輸入された」ものなのだから、その法面の被覆も輸入品で、人工的になどと考えるのではなく、ましてや、どこでも同じように統一してなどと考えることもないのだ。

これは牧野にしてもそうで、昭和の初期までは放牧の馬はもっぱらササが飼料だったし、牛もススキやハギを食わされていた。いわゆる牧草になったのはそう遠いことではない。それは牧草の方が楽だからそうなったまでだが、結局、それに縛られる結果になった。モンゴルの羊や馬は、依然として“土地の草”で養われているのではないか。

これは八つ当たりにも類するが、家畜はともかく、道路をはじめとしての構造物周りについてはもうそろそろ牧草一辺倒から脱却してもよかろう。そうでなくても自然公園を通過したりする場所も多い北海道では、そうした場所では外来種を使うとか、郷土種を使え、とかいう規制が出てきている。それなら最初から、いわば“北海道仕様”の法面を考えればいい。一步を進めて各地域仕様にまで展開すればもっといいではないか。

さらに、その種類も、工法も、新しくなるわけだから、これはパテントものである。種類の発見、品種の固定、栽培に至っては新しい産業化ということになる。

今まで、この分野に関して、道路技術者はもちろん、植物を供給する立場の分野も、少し既成概念に囚われ、その中で安住し、新しい品種を生み出すことも、それを要求することもなく、いわんや、それで優れた道路、優れた道路景観、優れた道路管理、そしてそれを支える優れた植物品種の発見も供給も考えずに過ごしてきたのではないか。ひょっとしたら大いにもうかるはずの仕事に踏み込まなかったのではないか。